濱松哲朗歌集
『翅ある人の音楽』
（典々堂）

抑圧や諦念を抱えつつ、しかし柔らかい。世界は薄暗いが、そこには小さな灯がある。そんな印象の一冊。

どうせこれも捨てられるつて知つてゐてそれでも揃へてかへす割り箸

ぶれぶれの写真に残るよろこびが削除の指を遠ざけてをり

どうせ〜それでもの展開の先にある割り箸は、菩薩のように微笑み、ぶれぶれの写真を削除しない指先は、刹那的に光る。

非正規で生きのびながら窓といふ窓を時をり磨いたりする

心身を病みてうしなふ職あればわれに値引きのパンやさしけれ

本来、職と心は別々のはずだが、この不安定さは相互に影響する。非正規で生をつなぎながら、それでも窓を磨く。心身の不調により職を失い、しかし命をつなぐためパンを食べる。この静かな心の揺れが、通奏低音となっている。

あいつの分も生きてやらうと云ふ声に不意に溺れたやうな気がして

初句二句は紋切型の追悼の言葉であるが、ふと違和感を覚える。それは生者より死者の側に近く寄り添っているからだろう。ここにも祈りの灯がある。

（大西淳子）

佐クマサトシ歌集
『標準時』
（左右社）

ずっとテレビがついている部屋。雑踏。あるいは静寂を破る生活音。そういうものの中に作者の輪郭が浮かびあがり、目を凝らすと消える。主に二十代の作品を収録した第一歌集としては、驚くほど〈私〉が淡い。

私から自己紹介をしますから主語を補い聞いてください

このような調子でぐらりと足場を変えられ、いつの間にか作者の顔が見えそうで見えない位置に立たされている。そんな中で漸く〈私〉像を感じられたのが次の歌だ。

テーブルの隅のグラスを内側に寄せてもう一度聞き返す

なんだか不穏の前触れを感じる歌だが、作者はまずグラスが落ちないようテーブルの内側に置きなおす。どうやら細やかな性格の持ち主らしい。

本書では所謂ただごと歌と呼んでいいものか迷うほど小さな出来事も多く歌われている。

蛇口ひねれば蛇口から出る水の音　それをコップで受け止める音

これは歌集というより、几帳面な書記による記録の集まりなのかもしれない。その視座に当然〈私〉はいない。

「大袈裟だと思う。短歌を詠むだなんて。」というあとがきが印象に残った。

（清水美里）